

樸 から版DX



【2021年度報告】

2022
vol.2

もくじ

ごあいさつ	01
対談：若松英輔×奥田知志	02
希望のまちプロジェクト	04
事業紹介	06
相談事業	07
困窮者・ホームレス支援	08
子ども・家族支援	10
高齢福祉	11
居住支援	12
就労支援	14
刑務所出所者等への更生支援	14
障害福祉	15
地域共生社会創造	16
政策提言・周知活動	20
会計報告	21
応援メッセージ	22
サポートのお願い	24
法人賛助会員	24
事業所一覧	25

表紙の写真について

2022年6月4日、「希望のまち」建設予定地にて、地元北九州市のイラストレーター黒田征太郎さんと地域の子もたちで「希望のまちの看板をつくろう！」と題したイベントを行った際の様子。50名ほどの子どもたちが、かわるがわる筆をとりました。看板は現在、予定地に建てたプレハブ「きぼうのSUBACO」の壁面を飾り、道行く人の目を和ませています

ほうぼく

抱樸の由来

「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめること。

抱樸は原木を抱き合う人々の家。

樸を抱く——「抱樸」こそが、

今日の世界が失いつつある「ホーム」を創ることとなる。

ホームを失ったあらゆる人々に今呼びかける。

「ここにホームがある。ここに抱樸がある」

沿革

1988年
「北九州日雇越冬実行委員会」として活動を開始

2000年
「NPO 法人 北九州ホームレス支援機構」設立

2001年
八幡東区に「自立支援住宅」設置、家賃債務保証事業「保証人バンク」開始

2004年
北九州市から委託を受け、「ホームレス自立支援センター北九州」開所
「認定NPO 法人」の認証を国税庁より受ける

2005年
「自立生活サポートセンター」発足

2007年
「ホームレス支援全国ネットワーク」発足
(代表：奥田知志)

2010年
福岡県地域生活定着支援センター事業を受託

2011年
「若年者就労支援事業」開始

2013年
「抱樸館北九州」および「デイサービスセンター抱樸」開所
「多機能型事業所ほうぼく」開所

2014年
団体名称を「抱樸」に変更
「子ども・家族marugoto 支援事業」開始

2015年
「生活困窮者自立支援事業」を中間市から受託

2017年
見守り支援付き住宅（プラザ抱樸）開始

2018年
「第2 作業所ほうぼく」「グループホーム抱樸」開所

2020年
「希望のまちプロジェクト」開始
コロナ緊急クラウドファンディングにて1億円を達成

2022年
「空き物件を活用した支援付き住宅事業」が「2021 北九州 SDGs 未来都市アワード」大賞受賞

ごあいさつ

コロナ禍が過ぎ去らぬまま、物価高、そして戦争という事態となりました。ギリギリのところを持ちこたえてきた方々の悲鳴が聞こえています。NPO 法人抱樸は、貧困問題に長く取り組んできました。家のない人には家を、仕事のない人には仕事をと、お一人お一人の現実に合わせて活動を模索してきたのです。

その活動の中で私たちは「経済的困窮（ハウスレス）」と「社会的孤立（ホームレス）」というふたつの困窮があることを知りました。そして、これらの課題に取り組むことは、貧困との闘いであると同時に「平和を創り出す」ことにつながっていると私は考えてきました。

今回の戦争を通して見えたのは、どれだけハイテク兵器を駆使しても最後は人が投入されるという現実です。この現実は、いくら偉い人が「戦争をするぞ」と言っても戦場に行く人がいなければ戦争はできないということを示しています。しかし、戦場なんて誰も行きたくないはずです。それでもなぜ人は戦場に行くのでしょうか。それは「食えない」からです。格差と貧困が「戦場で稼ぐしかない」と人を誘います。「貧しさ」こそが戦争遂行には欠かせない要素です。抱樸の困窮者支援は、この意味で平和の営みだったと思います。

さらに「ホーム」と呼べる人との関係がないこと。つまり、「さびしさ」が人を戦場に向かわせます。今、若者の多くは自分の存在意義を見出せず、「自分はどうでもいい存在だ」と言います。そこで必要なのは「食べられること」と共に「出番」や「承認」です。「さびしい」ときに、「名誉」を手土産に「君が必要だ」と焚きつけられると人は戦場に向かいます。そんな「危ない出番」ではなく、本当に「その人がその人として認められる場所」を創りたい。抱樸は「さびしさ（ホームレス）」とも闘ってきたのです。

そしてもうひとつ。「学びのなさ」が人を戦場へと向かわせます。抱樸には学校に行けなかった方々が多く来られます。義務教育さえままならない状況は、進学や就職、社会参加に影響を及ぼし、低収入という結果を招きます。さらに「学びのなさ」がことばによるコミュニケーションを困難にした結果、人を暴力へと駆り立てます。抱樸は、この三つの困難。「貧しさ」「さびしさ」「学びのなさ」に取り組んできました。これは「平和への道であった」と私は考えています。

戦争の時代にあって私たちは抱樸の活動をさらに進めていきたいと思っています。これからもご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

NPO 法人 抱樸 理事長 奥田知志 | Tomoshi Okuda

奥田知志



「補う支援」から「ととのえる支援」へ

若松英輔（批評家・随筆家）× 奥田知志（抱樸理事長）

全国から1億円以上の支援金が集まった「コロナ緊急クラウドファンディング」から1年経った2021年8月。抱樸のYouTube番組「ほうぼくチャンネル」では、随筆家の若松英輔さんと理事長・奥田知志による対談を配信しました。「足りないものを補う」ではない支援のありようとは――。

「私」たちはひとりで立っているのか？

奥田：2020年5月に「ほうぼくチャンネル」に出演いただいた際、「今年中にぜひ北九州にお呼びしたい」と言ってお別れしたと思うんですが、まさかコロナ禍が今も続き、まったく動きがとれないままになるとは思いませんでした。この1年間どうされていましたか？

若松：1年経った感じがしないですよ。今まで私たちが経験してきた1年より長い、短いというよりも、「目印が付けにくい」んだと思います。このカレンダーを奪われた生活を生きるというのは、人間にとってみればとても大変なことでしょうね。

奥田：「時間の区切りがない」というのは、ホームレスになった人たちがよく言われる言葉でもあります。たとえば、「盆も正月もない」と言うんですね。野宿生活とはまさにそういうものです。抱樸では、20数年前から、正月やお盆の時期に特別な集会をもってきました。いずれも前年に路上で亡くなった人たちの追悼から始まります。「人を悼む」そういうことも路上では奪われます。そこで「明けましておめでとう」と言うかどうかという問題があって。

若松：ああ、なるほど。

奥田：ホームレス状態の人たちからすると、「何がめでたいんや」と。でも、やっぱり「明けましておめでとう」から始めようと、決めました。「それでも生きて正月を迎えたじゃないか」という区切りが必要だからです。ずーっと路上の生活をしていると、時の区切りがなくなる。だから少々強引にでも、区切りをつくろうと思ったんです。

若松：今回のコロナ禍で私たちが学んだのは、危機のときに、横にいる人の手を握れるかどうかということ。遠くの人じゃなくていいから、近くにいる人の手を握る。そのことを意識して、少なくともこれから2年間は生きていきたい、という気持ちが強くあります。

奥田：2020年の春頃、トイレトペーパーがなくなったのは象徴的でした。あのときに、ある意味「正直な姿」が出たと思いました。自分や家族を守ることで精いっぱいになって、それ以上の想像力や連想力が働かない。「自分だけ」という現実が浮き彫りになった。「医療関係者に感謝」と一方で言いながら、医療関係者の家族を地域から排除する動きもありましたよね。

若松：多くの人は主語が「私」で生きている。でも冷静に考えてみれば、ひとは常に「私」でありながら「私たち」ですし、もうちょっと言うと、生きている人たちだけじゃなくて、亡くなった方を含めて私たちの生活が



あるわけですね。「私」がひとりで立って生きている、というのは幻想です。その幻想から抜け出たほうがいいんだと思うんですよ。人は自分の道を歩くとき、困難があったり、あるいは誰かと一緒に歩かなきゃいけないことがある。だけど、私たちはいつからか、「歩きやすい道」が自分の歩くべき道なんだ、とどこかで思い込んでいるふしがあるんだと思います。

人びとが「人生」を生きるために必要な支援を目指して

若松：もしかしたら多くの人は、支援は「足りないものを補うもの」だと捉えているのかもしれませんが。でも、支援は「私たちの問題をととのえてくれる」ものだと思うんです。欠落したものに何かを足してゆく、ということではなくて、ととのえ続けていかないと止まっちゃうものなんですよ。たとえば、「抱樸さんは1億円お集めになったから、もういいんじゃないか」というようなことを考えている人たちも、少なくないかもしれない。でも、そうではないんですよ。

奥田：今まで行政や様々な制度のなかで言われてきた「支援」は、「自立支援」です。要するに、自ら立つことを支援する、という発想です。それは基準値（ゼロ地点）があって、その基準を下回ったときに支援をし、ゼロ地点まで戻したら、「あとは自分でやりなさいよ」となる。その先はいわば放ったらかされるわけです。でも、本当の支援はそこから始まるんです。

そのゼロ地点の最低基準を保障するのは、国の役割です。憲法でいえば、第25条の生存権の問題です。だけど、実は憲法第13条の「個人として尊重される（個人の尊重）」とか「幸福を追求する権利」が重要で、その人がその人らしく生きることが叶うかです。しかし、そこはこれまでの「支援」では重視されない。言い過ぎかもしれないけれど、正直その先は「自己責任」の世界。30年以上、困窮者支援の現場で感じているところです。

若松：作家の遠藤周作は「人間には生活と人生、両方あるんだ」と言っています。「生活」のことしか考えられない状態は、やっぱりよくないんだと思うんです。すべての人が、その人の人生を生きる権利がある。あんまり「権利」と言いたくないんですけどね……。だから、「生活がととのったからいいじゃないか」という認識は根本的に誤っている。我々は経済的な困窮だけではなく、様々な困難に直面していて、場合によっては「生活する」以外に何もできない状況に陥ってしまうこともあるんですよ。そのときに、人がその人の人生を生きるために何が必要かということとは、常に考えていかなければならないと思うんです。

奥田：抱樸は30年間「この人には何が必要か」を第一に考えてきました。家がないなら、家を、仕事がないなら仕事を、と。だけどころに大事だったのは、「この人には誰が必要か」ということでした。たぶんそこが、今若松さんがおっしゃった「人生」に関わる場所だと思います。

今足りていないのは「春を待つ場所」

奥田：さっき話したゼロ地点まで戻す「自立支援」は、足し算型の支援なんだけど、そこから先に入ると、つまり生活がととのって「人生」という水準の話になると、時には引き算が入ってきますよね。ちゃんと引き算が成立するかどうか。ずっと足し算的な発想でいると、いつまで経っても自分の「生活」のことばかりで、他者性が出てこない。誰でも「もっといい暮らしがしたい」とか、お金はいっぱいあるほうがいいと思うだろうけど、自分の「人生」ということを考えたときに、一旦手にしたパンを手放さねばならない。聖書のコヘレトの言葉のなかに「汝のパンを水の上に投げよ。後の日に汝それを見出さん」ということばがありますが、私は、幼いころからあのことばが好きで、そういうことが「人生」を考える上で大事なところだと思います。

若松：コヘレトのその言葉は本当に大事で、私たちには「からだの糧」と「たましいの糧」の両方があると思うんですね。両方のパンがある。私たちは、からだのパンについてはよく考えるんですけども、たましいのパンについても、これからはもう少し考えていきたいですね。たとえば、生活の困窮にある人たちに「学ぶ喜び」はあったのか、ということを我々は考えていかなきゃいけない。学んで、自分を発見して、あるいは学んだことによって誰かに少し役立つ――そういう喜びというのは、かけがえのないものじゃないですか。そこにはあたかも、自分で種を植え、野菜を育てて、食べているかのような「充足感」があるんだと思うんです。そういうことまでを含めた「粹組み」を作れないかと、この1年間くらい考えていました。

奥田：なるほど。野宿を脱し自立された方たちが、自分を振り返り語る場面がありますが、野宿時代のことを自ら振り返ることで何か大事なものに気づき、学んでおられるように感じることがありますし、そういう彼らの言葉に学ばされるというか、助けられることがあります。

若松：人びとが単に何かをもらおうというだけではなく、その人のなかの「なにか」が開花するかたち、ですよ。だから、もし学んでない期間があるんだとしたら、それは遅れて咲くわけですけども、それもまったくかま



わない。このあいだ知って驚いたんですけど、雑草は5～6年間くらい地中で我慢するんですってね。

奥田：そうなんですか？

若松：繁茂力の強い草が出ているときに、自分が地上に出て行ってもあまり長く生きられない。だから5～6年間くらい平気で我慢して、出てくるタイミングを待つというんです。けれども、私たちの人生にもそのくらいのことはありますよね。そうやって遅れて咲いてきたときに、「それでいい」と、「それは素晴らしいことなんだ」ということを誰かが真剣に言わないといけな

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

若松：それもそうですし、僕は「実はもうやってきている」ということを、誰かが真剣に言わないといけな

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

奥田：それはつまり、今はツライかもしれないけども、「その先」を信じる力、なんですかね？

text: Sogo Hiraiwa

希望のまちプロジェクト



みんなが「ホーム」になれる場所

2020年4月28日、NPO法人抱樸は暴力団工藤会の本部事務所（北九州市小倉北区）の跡地を民間企業から買い受けました（*）。そして私たちは「特定危険指定暴力団」の活動拠点であった地を、子どもや若者を含む全世代が地域で共に生きていくための拠点として再生させる事業を「希望のまちプロジェクト」と名付けました。

希望のまちの施設を拠点として、世代や属性を超えたさまざまな人々が「その人らしく生きる」ための「居場所」と「出番」のある「まち」をここから生み出していきたいと願っています。誰かと出会い、共に生きることの喜びを、北九州の地から全国に広げていきます。

*全国の皆さまからのご寄付により 2022年3月に土地購入資金1億3,000万円の支払いを完了し、正式に土地を取得（抵当権の抹消）することができました。今回、正式に土地が取得できたことにより「希望のまちプロジェクト」の主体となる社会福祉法人の基本財産を確保することができました。改めてご支援をいただいた皆様に感謝申し上げます。

●希望のまちで行う事業

1 | 子どもの居場所と家族の支援

子どもたちへの学習支援や日常的な居場所を作ります。また、子どもの家族からのあらゆる相談も受け付けます。子育ての悩みや子どもの進路相談、家族の就労支援や障害・介護等福祉制度へのつながりなど、あらゆる相談に対応します。

2 | 地域生活サポートセンター

地域生活をサポートする「自立生活サポートセンター」や地域の互助会を創設します。また、ボランティアセンターやコミュニティースペースを設けることで、助け合える地域のつながりを生み出します。

3 | 救護施設

どんな人でも断らず、尊厳のある生活を送ることのできる居住施設（救護施設）を作ります。1階部分の地域のコミュニティースペースで地域の方々とも交流のできる地域一体型の救護施設となります。

4 | よろず相談窓口

希望のまちに設置される相談窓口には、どんなお悩みもまずは聞く「よろず相談員」が常駐します。また相談者を「待つ」スタイルの相談窓口だけでなく、悩みを抱えた人を「発見」し「出向く」スタイルの相談員（巡回相談員）も配置します。

5 | 地域活動スペース

地域の人たちがいつでも集える居場所を作ります。希望のまちの1階は体育館のような大ホールになる予定です。そこにはカフェや本棚オーナー制度によるミニ図書館などを設け、地域の方が立ち寄りやすい、集いくなる場所づくりを目指します。

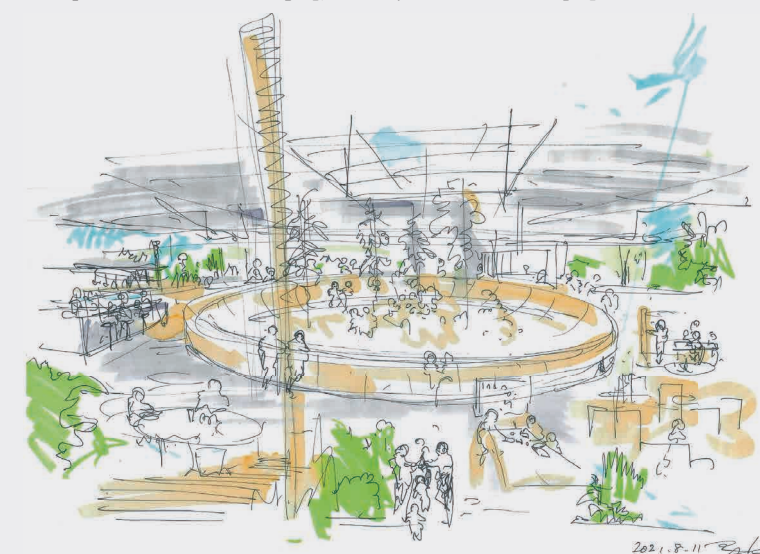
6 | 障害のある方の居場所

生きづらさを抱えた方や障害のある方の居場所となり、地域の方々との交流を生み出します。

7 | 避難所・防災機能

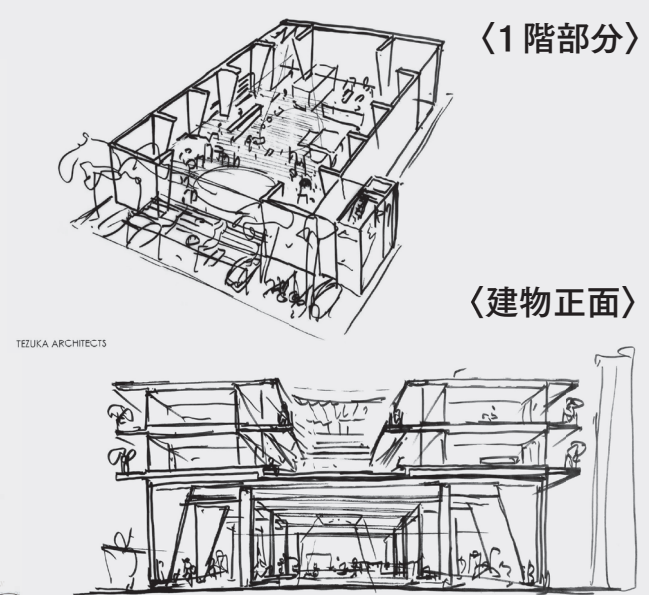
支援物資を備蓄し、災害時には地域の方に避難所として施設を開放します。

●希望のまちの中核施設イメージ図



〈1階部分〉

〈建物正面〉



「希望のまちプロジェクト」のメンバー

代表：奥田知志（NPO抱樸理事長）

顧問：村木厚子（元厚生労働事務次官）

有識者会議議長：稲月 正（北九州市立大学教授）

コミュニティデザイン：山崎 亮（Studio-L）

設計監修：手塚貴晴＋手塚由比（手塚建築研究所）

▶希望のまちのロードマップ

2019年10月	「希望のまち」プロジェクト計画スタート
2020年4月	工藤会本部跡地の買い受け
2022年3月	建設予定地の完全取得
2022年4月	寄付キャンペーンのスタート
2022年9月	社会福祉法人設立申請
2023年9月	施設建設開始
2024年10月	拠点施設完成（開所目標）

●にわかプロジェクト始動！

希望のまちの敷地に建物が完成するまでのあいだ、空き地をみんなが集える「庭」のような場所にするためのプロジェクト（「にわかプロジェクト」）を進めています。現在、空き地にはいつでも立ち寄れるプレハブ（きぼうのSUBACO）が建っており、この場所を利用したカフェやものづくりイベントなどを行っています。目印は、北九州在住のアーティスト黒田征太郎さんと地域の子どもたちで作った素敵な看板。お近くにお越しの際は、ぜひ立ち寄ってみてください。



●希望のまちへのご寄付について

希望のまちを作るには、皆さまの力が必要です。建設事業費10億円のうち、非制度事業分の3億円を皆さまからの寄付で賄いたいと思っています。制度の狭間にある方を支援するためには制度にしばられない資金が必要です。まずは寄付という形でどうかプロジェクトにご参加ください。

振込の案内

●ゆうちょ銀行からお振込みの場合

01750-9-173501 特定非営利活動法人抱樸 トクヒ） ホウボク

●他行からお振込みの場合

ゆうちょ銀行（9900）一七九（イチナナキュウ）支店 当座 0173501

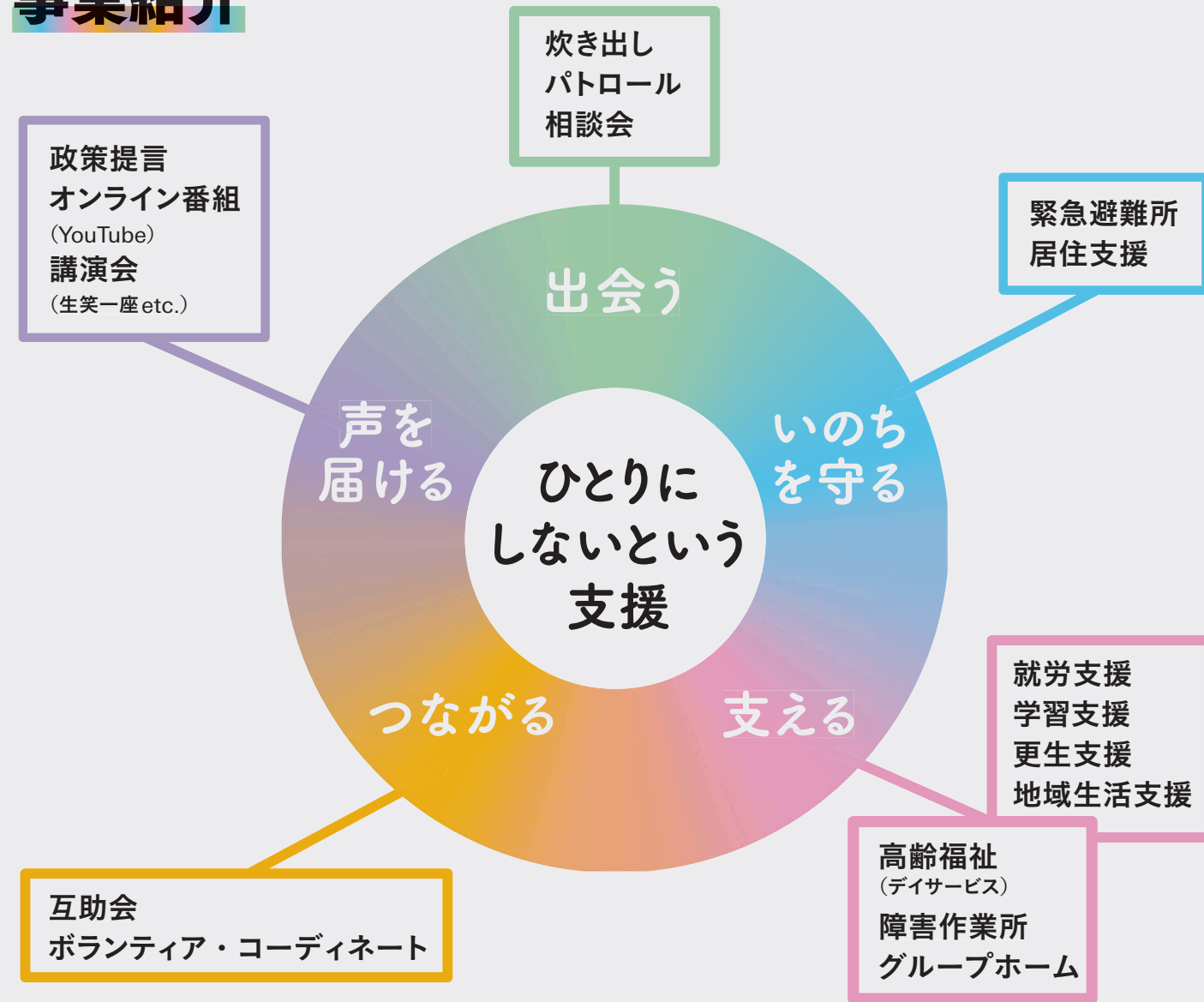
●クレジットカード

希望のまちの特設サイトよりご寄付いただけます。

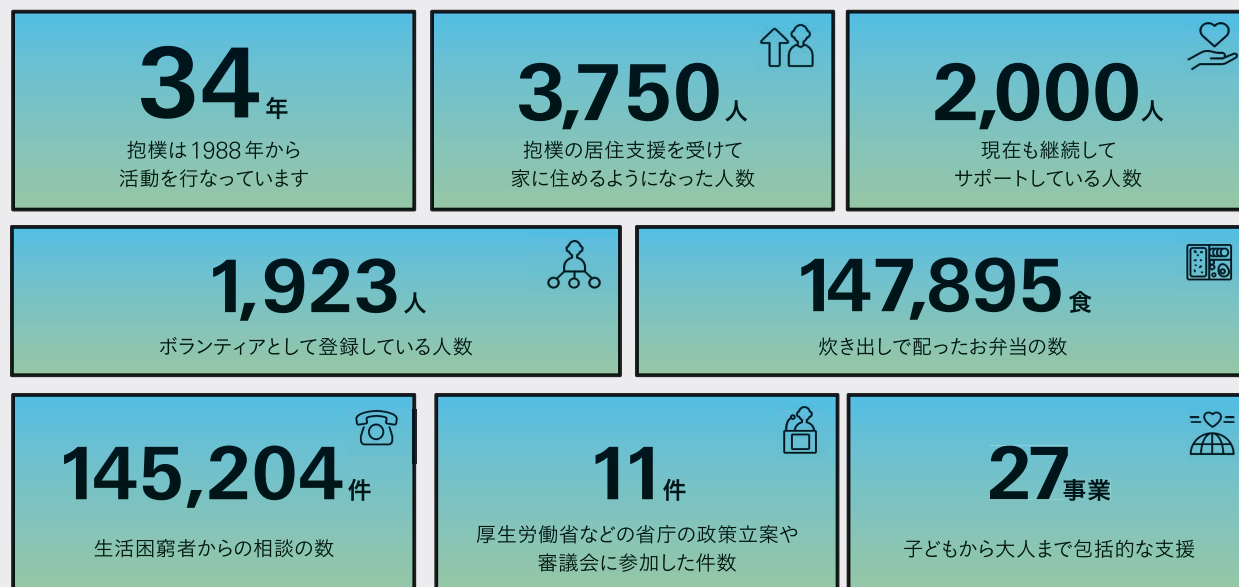
希望のまち
▽特設サイト▽



事業紹介



数字でわかる抱樸



相談事業



生活のお困りごとや心配など、まずはお話をお聞きします

ひとりで悩んでいてもなかなか先が見えない。そのようなときに相談できる場所があれば、次に進む勇気が持てたり、自身の気づかなかった可能性が見えてくることがあります。誰かに話を聞いてもらうだけでも違うものです。相談に来る方のお話やお気持ちを聞きながら、複雑に絡み合った困りごとを紐解き、今後のことを一緒に考えます。

◎ホームレス自立支援センター北九州

・巡回相談（北九州市委託事業）

生活に困窮した方の全般的な相談にのっています。ご本人からだけでなく、弁護士や警察、病院、一般の市民の方からも「〇〇さんの相談にのってほしい」と依頼があります。また、ホームレス状態の人にこちらから出向き相談を行なうアウトリーチ型の相談事業も行っています。



・火曜相談会

ホームレス状態の方向けに、毎週火曜日に開催している相談会。決まった時間・決まった場所に相談できる先があることで助かる人が大勢います。

※2021年度：相談件数 243件

・法律相談会

ホームレス・困窮者支援に協力していただける弁護士・司法書士・社会保険労務士のグループ「法律家の会」メンバーが、毎月1回の法律相談会を開催しています。

◎中間市市民生活相談センター

生活に困っている方の相談事業として、中間市からの委託事業「市民生活相談センター」の運営を行っています。

※2021年度：相談件数 319件

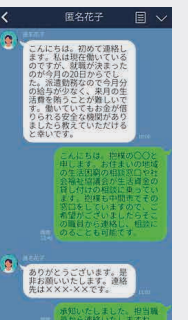
※コロナにより相談が激増（2019年：162件）

◎生きるための包括支援事業・つなぎ支援（ライフリンク委託事業）

2021年度から開始した自殺対策事業です。自殺を考えている人のお話を聞き、切迫性や緊急度が高い方に対して、継続的な架電や必要な場合は福祉的資源につなぐといった支援を行っています。

◎LINE 相談

生活の相談は、お電話やメールだけでなく、LINE での相談も受け付けています。



コラム1

ホームレスとハウスレスは違う

私たちは「ホームレス（社会的孤立）」と「ハウスレス（経済的困窮）」は異なる状況だと考えています。「この人には何が必要か?」と「この人には誰が必要か?」の両面を考えます。以前、中学生から襲撃を受けていたホームレスの方がこんなことを言っていました。「あの中学生は、家（ハ

ウス）はあっても居場所（ホーム）、心配してくれる人がいない。心配してくれる人がいない者の気持ちは、俺は（ホームレスだから）わかるなあ」。その言葉で、私たちはハウスレスとホームレスは違う、ホームレスは路上生活者に限らないことに気づかされました。

▶ 困窮者・ホームレス支援



自立が孤立に終わらないために

社会に居場所がない。困っているのに、「助けて」と言える誰かがいない。生きること疲れ果て、自分が困っていることにさえ気づけない。私たちの周りには見えるところにも、そして見えないところにも多くの孤立と困窮があります。

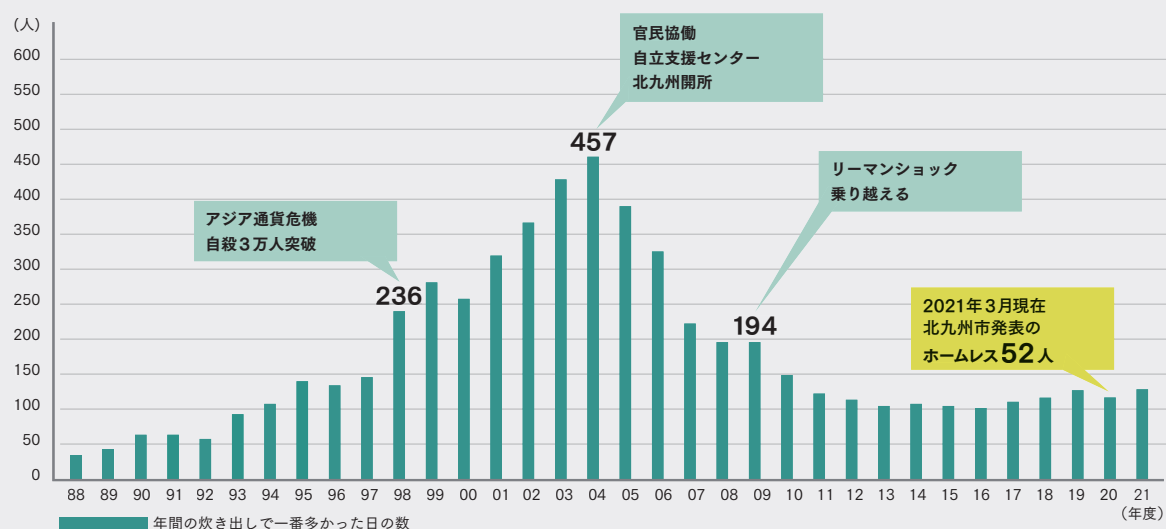
抱樸は社会から「自己責任」と言われ疎外されてしまった方々に寄り添い、次のステップへ進むための伴走を行なっています。それは、本人や家族ばかりに責任を求める社会の風潮のなかで、赤の他人も含めて「助けて」と言える社会をつくるための活動です。

●炊き出し・パトロール

北九州市小倉北区の勝山公園で、年間30数回の炊き出しをしています。炊き出しの後は、北九州市内・下関の7方面に分かれて、炊き出し会場に来られなかった方を訪ねるパトロールを行なっています。お渡しするお弁当は、炊き出し協力団体(※)のボランティアの皆様が準備したもので、お配りする衣類は全国から寄付で集まったものです。炊き出しはいのちを守る活動であり、「これからの相談」につながる出会いの場でもあります。

※炊き出し協力団体：カトリック黒崎教会、カトリック小倉教会、カトリック天神町教会、カトリック戸畑教会、カトリック水巻教会、カトリック湯川教会、カトリック若松教会、在日大韓基督教会小倉教会、下関グループ、聖小崎ホーム、日本キリスト教団若松浜ノ町教会、日本バプテスト連盟枝光キリスト教会、日本バプテスト連盟小倉バプテスト教会、日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会、日本バプテスト連盟若松バプテスト教会。

炊き出しで出会った人数の推移



*2021年4月～2022年3月 炊き出し回数31回のべ人数3150名(うち女性274名)平均98.4名/回



市内の社会福祉法人が豚汁を提供してくれています



全国の皆様から寄せられたお手紙をつけたお弁当をお渡します

●ホームレス自立支援センター北九州

主に就職を目指す方の支援施設として、北九州市から「ホームレス自立支援センター北九州」の運営を委託されています。2004年9月にスタートし、これまでに1,000人を超える方が利用。ハローワークとの連携により、多くの方が仕事を見つけて施設を出発していきました。求職だけでなく、自動車免許などの資格取得も支援しています。



●自立支援住宅

2001年、北九州ではじめての自立支援の仕組みが自立支援住宅です。ホームレス状態からそのまま入居できる「家」を準備し、複数のボランティア担当者が伴走しながら、地域への出発を支えます。自立が孤立に終わってはだめだとの思いから、担当者とのつながりは入居者が自立支援住宅を出た後も続き、お見舞いや誕生日のお祝い、そして看取りまで行ないます。

*2001年5月以降のべ215名の方々が新しい生活へと出発しました。



●緊急シェルター抱樸館

路上生活は大変過酷で、いのちに関わります。路上生活をする方が減少している現在でも、年に数名は路上で逝去、または緊急搬送先の病院で治療が間に合わず亡くなるという現実がこの日本にあります。わたしたちは北九州市内にシェルターを準備し、緊急避難のための場所を確保しています。



正会員の声

澤田直章さん(自立支援住宅委員会・炊き出し委員会)



もう10年近く抱樸のボランティアとして、自立支援住宅と炊き出し委員会で活動をしています。定年退職して、40年ぶりに北九州に帰ったら、昔の友達もいないし両親も亡くなって独りぼっちだと感じていて。残りの人生どう生きようかと思ったときに、誰かのためというとおこがましいけど、やっぱり社会貢献につながることがしたかった。抱樸でボランティアをしていると人生の学びがある。自分が担当していた自立者の人に、趣味の写真を見せると喜んでくれて、そうするとまた撮りたいなって思うんだよ。本当に、支えているつもりが支えられているんだよね。普段は関わらないような世代の人とも、ボランティアで交流できるし。まったく赤の他人の結婚式に呼ばれることもあるんよ! そんなつながりができるなんて、すごいことだよ。

▶ 子ども・家族支援



子どもの困窮は「家族の困窮」

相談を受けるなかで、「幼少期に学校に行けなかった」「昔から家に居場所がなかった」という話をよく聞きます。子供時代の経験は、その後の人生を大きく左右するものです。しかし、「子どもの貧困」が7人に1人ともいわれ、貧困が親から子に連鎖している現在の状況では、親の責任を求めたところで問題は解決しません。

抱樸はこの困窮の連鎖を断ち切るため、2013年から子どものいる困窮世帯や社会的孤立状態にある世帯の支援事業を行っています。子どもへの学習支援を中心にしながら、その家族に対しても包括的かつ持続的な支援をしています。

学習支援

◎集合型学習「スイトレ」

2013年から、子どもたちへの学習支援をスタートさせました。学校や家庭の環境といったさまざまな事情により勉強したくてもできない状況に置かれてしまう子どもたちの学習支援を無料で行なっています。集合型の学習支援「スイトレ」では、大学生や社会人のボランティアにも協力してもらいながら、宿題や受験勉強のお手伝いをしています。このスイトレは、多くの子たちにとって親や家族以外の大人と話せる場所、安心できる放課後の居場所にもなっています。



◎訪問型学習支援

さまざまな事情から集合型の学習支援に出てこれられないような子どもたちには、家庭訪問による学習支援も行なっています。訪問を続けていると、子どもだけでなく親との関係も作られていくので、家庭全体の生活支援につながることも多々あります。ママやパパから医療や体調、生活、学校、お仕事や医療、介護の悩みなどを聞き、私たちにできることはないか、一緒に考えます。なかには、引っ越しのお手伝いをすることもありました。

◎社会参加

子ども時代から色々な人や物事に触れることで、人生の選択肢が広がるのではないかな。子ども時代に「誰かから大切にされた」という経験を持つことで、自分のことを大切に思い、そして誰かのことも大切に思える人になるのではないかな。そのようなことを考えながら、私たちは子どもたちが家庭や学校だけではない「社会」に触れるためのプログラムやレクリエーションも行なっています。一緒に釣りや海水浴に行ってみたり、クリスマスや夏祭りなど季節のイベントを行ったりもしています。



◎よるかふえ

安心できる居場所として「よるかふえ」を運営しています。写真は、生まれてから一度も誕生会をしてもらったことがない高校生のために、同学年の子の発案で開催した初めての誕生会。一方、勉強している子もいる雑居っぷり。これが、居場所「よるかふえ」です。

＊コロナ感染防止対策で、2021年度は休止中



◎その他の生活支援

私たちの支援は学習だけに限りません。家族と学校との関係のご相談に乗ったり、必要があれば求職や医療、介護的なご相談を受けたり、ただ話を聞いたり。そのようなつながりを持つなかで、子どもも親も幸せを感じられるようにお手伝いします。また、子どもたちが成長しても、そこで支援が終わり、というわけではありません。大人になった彼・彼女らに対し、「困った時にいつでも助けを求められる場所」として残っていくためにも、少ないスタッフ数ではありますが奮闘の日々を送っています。コロナのため、多くの事業が休止となりましたが、小学校・中学校の卒業式にはスタッフが参加。高校合格発表にも付き添い、喜びを共有しました。

＊2021年度対象者人数 子ども113名とその家族

◎クラウドファンディングの実施

2021年10月22日から11月30日まで、抱樸の子ども支援クラウドファンディング「電気鍋と食材費用 食事を作る力、生き抜く力を」を行ないました。子どもたちが自分で食事を作り、食べることのできる環境を作りたいとの思いで始めたこのクラウドファンディングは529名の方からご支援をいただき、総額373万円を集めることができました。皆さまからいただいたご寄付で、子どもたちのいる家庭に電気鍋と食材を届け、調理実習を行ないながら子どもたちの生きる力を家族と一緒に育てています。



▶ 高齢福祉



支援は「出会い」から「看取り」まで

私たちは、出会いから看取りまでの支援をします。住み慣れた地域で安心してその人らしく生活できるように、介護事業も行なっています。

◎デイサービスセンター

デイサービスセンター（地域密着型通所介護）を運営し、高齢者の生活支援を行なっています。＊2021年度は15名の方が登録され、毎日7～9人の方が通っています。

一日の流れ

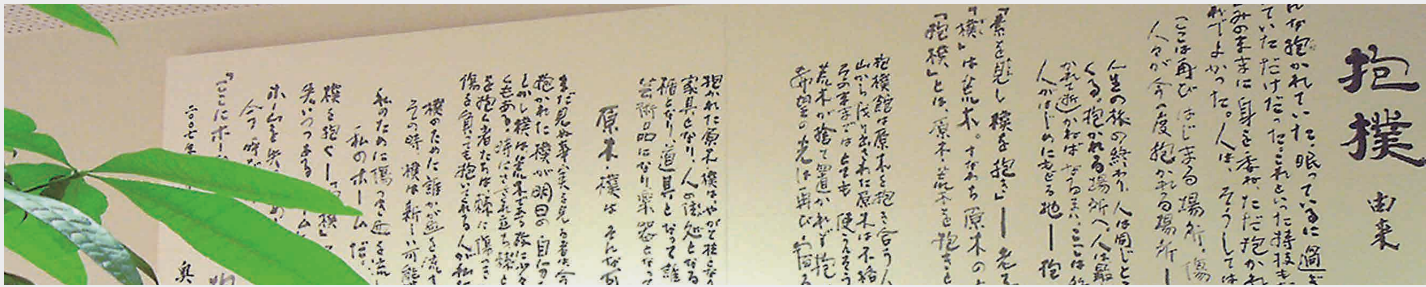


10:00：利用開始、バイタルチェック、入浴、	13:00：アクティビティ（塗り絵、トランプ、誕生日会など）、
アクティビティ、機能練習（体操など）	機能練習（体操など）
11:00：嚥下体操（飲み込み練習）	15:30：利用終了
12:00：昼食	



利用者の皆さんが毎月、季節にあわせたテーマで作成している作品

▶ 居住支援



「家」から始まる生活の基盤づくり

住居を失うということは、第一に「生存的危機」、第二に「社会的危機」、そして第三に「孤立の危機」を意味します。住居を失い、路上生活になるという事態はすぐさま生命の危険を意味します。また、あらゆる行政手続は現住所地での手続き（申請）となります。住居を失うとすべての社会的手続きができなくなります。さらには、人は一定の場所に暮らすことで地域社会への参加の基礎を築きます。これらの意味で、住居を確保することは何よりも優先される課題（ハウジング・ファースト）であると言えます。

「居住支援」とは、建物（ハコ）を含む総合的概念であり、「子どもを育て、客を招き、社会活動を行ない、生活していくこと」を支えるものです。相談、住宅確保、保証人確保及び社会的手続き支援、生活支援、見守り支援、孤立防止と社会や地域への参加支援、葬儀を含む死後事務など、本人の生活（人生）全般にかかわる支援です。

●抱樸館北九州

「抱樸館北九州」は、多くの方々の寄付によって建てた入居施設です（2013年9月オープン）。路上生活を脱出し自立した人たちのなかには、障害や金銭面などさまざまな生きづらさを抱えるために、どうしても地域生活に馴染めず、施設入所も難しい人たちがいます。そんな方たちを迎える場所が必要でした。

「ここは再びはじまる場所。傷つき、疲れた人々が今一度抱かれる場所」。1階にあるレストランには、「抱樸由来」と題した大きな額が掲げられています。

【施設概要】

- ・1階 レストラン、デイサービスセンター
- ・2～3階 完全個室の居住スペース（30室）、入浴施設
- ・24時間のスタッフ配置

*2021年度 入居者数30名（2022年3月）新入居4名 退去2名
2020年10月1日より、日常生活支援住居施設（※）に認定（北九州市認定）



※ 生活に困っている方向けに家賃を低く抑えた無料低額宿泊施設のうち、面積や耐震・耐火性能など一定基準を満たした施設に対して、行政が生活支援のためのスタッフ人件費を助成する制度が2020年10月1日から始まりました。抱樸は、制度開始当初からこの認定を受けています

◎見守り支援付き住宅

（プラザ抱樸／グループホームほうぼく）

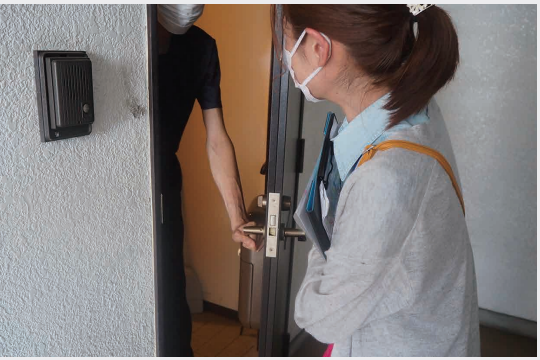
2017年9月からスタートした見守り支援付き住宅（プラザ抱樸）は、単身生活が可能であるものの何かあったときのための見守りや、時として生活支援が必要な方に対して、住まいと生活支援、家賃の保証を組み合わせた「持続可能な居住提供」を実現するモデルです。2021年6月からは20室を「日常生活支援住居施設」（生活保護法に基づく制度事業）として運営を開始したことで、より手厚い支援が可能となりました。

見守り支援付き住宅と日常生活支援住居施設、さらにはグループホーム（共同生活援助）を組み込むことで、支援ニーズに応じた「断らない支援」が可能となっています。

コロナ禍で開催を見合わせていた、プラザ入居者間や地域の方が交流する「サロン」としての活動も今後再開する予定としており、抱樸としての居住支援のあり方をこれからも模索していきます。

【物件内容】

小倉北区（12階建てマンション）全室リフォーム済み、共同玄関オートロック、トイレ・浴室別



*2021年度入居者数 60世帯（2022年3月末）＋グループホーム11名（2022年3月末）

抱樸館入居者の声

Tさん（70代）

抱樸に来る前は、コインランドリーで寝泊りしよったもんね。置き引きにあったり、足けがしたりして、どうしようかなあって思いよったら、警察に抱樸を紹介されて、（自立支援センターに）一泊だけしたら入院になった。入院してるときになんか抱樸のボランティアの人が来て「自立支援住宅に入りませんか」って言われて。自立支援住宅に1年くらい入って、抱樸館に入居しました。抱樸館に入って、ほんとによかった。規則正しく生活できるようになったし。一人やったときは、夜中でもカップラーメン食べたり、弱いのお酒いっぱい飲んでちょっと喧嘩したりね。そういうの今はないもん。いちばん楽しいのはみんなとトランプしたり。やっぱり仲間ができたことが第一よね。気持ちのゆとりができたね。自分でも角がとれたなあっと思うよ。



Tさんのお部屋にはぬいぐるみや友達との写真がたくさん。こちらはお気に入り「もんきちくん」



抱樸館に入居し、塗り絵の才能が開花したTさん。それぞれの塗り絵にオリジナルの物語を書き加えている

◎「自立支援居宅協力者の会」による入居マッチング

不動産事業者がNPOと連携し住居喪失者の居住支援を実施するための組織で、現在、福岡県内約50社の不動産事業者が加入しています。「自立支援居宅協力者の会」の加盟企業が賃貸物件を紹介してくれるおかげで、北九州の活動での住宅確保率は100%！会の主な働きとして、①不動産物件の紹介、②入居後の見守り、③家賃滞納などの早期発見とNPOへの連絡、④退去や死去時の残置物処分などに関する協働を行ないます。

◎賃貸借契約時の保証人の提供

私たちは「住みたい」と「貸したい」を橋渡しするために、賃貸借契約を結ぶ際に家賃債務保証を提供しています。提供するものは「保証」と「暮らしの安心」です。

さらには、債務保証会社による家賃債務保証と抱樸の生活支援を組み合わせた「断らない家賃保証」サービスの提供も開始しました。ビジネスを組み合わせ、いのちを支えます。

▶ 就労支援



◎就労準備支援事業（中間市・北九州市受託）

さまざまな課題を抱え、すぐに仕事をするのが難しい方と一緒に悩み、考え、状況に応じた支援を行なっています。多様な研修や協力企業での就労体験を通して、本人にあった就労を目指します。

＊2021年度〈北九州市：研修生57名、中間市：研修生3名〉

◎技能講習（厚生労働省受託事業）

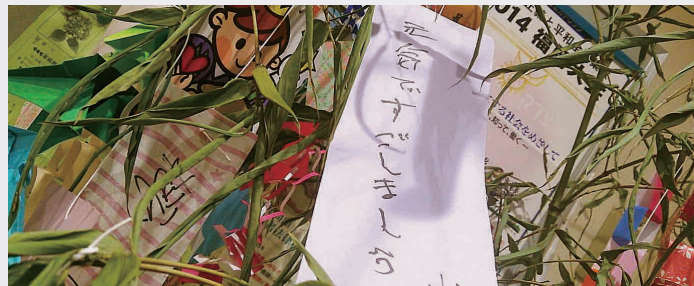
運転免許など免許の取得や技能の習得を支援することで、就職の可能性を広げるお手伝いをしています。

＊2021年度：受講数164件

仕事に向かうための土台づくり

私たちは「仕事」全般にかかわる支援に取り組んでいます。「仕事」は、稼ぐ・生きるための手段だけではありません。生きがいや誰かに必要とされることの幸せも、「仕事」のなかにはあります。

▶ 刑務所出所者等への更生支援



◎地域生活定着支援センター

高齢・障害などの困難により生活苦に陥り、犯罪に走ってしまう方がいます。たとえば、全国にある48ヶ所の地域生活定着支援センターには、高齢・障害などの課題を抱える方から、年間1,400件を超える支援依頼が来ています。

◎入口支援の取り組み

2021年度から地域生活定着支援センターの業務に、「被疑者等支援業務」が追加されました。刑事司法手続きの入口段階にある被疑者・被告人等のうち、福祉的な支援を必要とする方に対し、釈放後安心して生活できるよう支援をします。

＊2021年度：新規相談29名（入口支援）

コラム2

自己責任と出会った責任

現代において「自己責任」という言葉は、「出会った責任を回避する」言葉として使われているように思います。「それはあなた自身の問題だ」と言い切ることで、「その人を助けなくてもよい」と言い放つ社会（「自己責任論社会」）になってしまっているようです。

しかし、私たちはやはり「出会い」には責任があると考えています。「出会い」は時に深刻で、時に豊かな影響を私たちにもたらします。そして、人は一度出会ってしまうと、どれだけ忘れようと思ったとしても、決してそれを「なかったこと」にはできないの

です。もちろん出会いから生じたすべての責任を「とる」ことは私たちにはできません。しかし、出会った責任は「ある」のだから。そう思い続けることで抱樸の活動は34年間続いてきました。

▶ 障害福祉



生きづらさを抱えても役割のある生活を

抱樸は、就労継続支援B型と生活訓練の事業所を運営しています。

ホームレスや生活困窮状況に陥る方のなかには、さまざまな生きづらさを抱えている方がいます。そのひとつが障害です。生きづらさがあっても役割を見出し、その人らしく生き生きと能力を発揮してもらいたい。障害のある方の仕事づくり、生きがい、居場所づくりのために就労継続支援事業を行なっています。

多機能型事業所ほうぼく（抱樸）：2021年度登録者数 29名（一日平均利用 20名）

ほうぼく第2作業所：2021年度登録者数 32名（平均利用 20名）

【2021年度 作業内容】

- ・高齢者施設やマンションの清掃
- ・箱折りなどの施設内作業
- ・自動車部品の研磨・検品
- ・ウエス加工
- ・自主製品やお菓子の製造・販売
- ・農作業と収穫物を用いた製品づくり



小倉南区の農園を借りて
さつまいもを作っています

ほうぼくストア

<https://npovol.stores.jp>

作業所でつくった「まごころ製品」を通販しています。売上は利用者さんの工賃になります。ぜひご覧ください。



かわいいフェルトボールのしおり



1点もののエコクラフトの小物たち



手編みで作っているコースター



なにが届くかお楽しみ。くるみボタンのマグネット

コラム3 伴走型支援とはなにか？

「伴走型支援」とは、抱樸が提唱する支援のあり方です。これは深刻化する社会的孤立に対応するために、「つながり続ける」ことを目的とした支援として生まれました。その人が直面している経済的困窮や住まい・健康上の課題などを解決する「問題解決型支援」は不可欠です。しかし、問題解決型支援が行き過ぎると、「解決できたか、できないか」という「成果主義」に陥る危険性があります。伴走型支援は「解決」という結果ではなく、「つながり」という状態を重視します。どんな結果になるのであれ、「生きてつながっていること」に最大の価値を見出します。決して「ひとりにしない」こと。それが私たちの支援の根幹にある想いです。



▶ 地域共生社会創造



誰もが互いに助け合える仕組みを

私たちは、支援の専門性を高めると同時に、市民参加型の「社会づくり」を目指しています。地域の隣人としての見守りや助け合いが、「孤立」を生まないための何よりの力になるからです。出会いから看取りまで。「ホーム」を失った方たちとともに生き、支援／被支援の関係性を超え、「お互いさまの社会」を実現させるために、抱樸をプラットフォームにして、たくさんの「出会い」や「交流」の機会をつくりたいと願っています。

●地域生活支援（自立生活サポートセンター）

抱樸での支援を受け、地域での生活を再開した方々の見守りおよび生活全般の支援を行っています。再野宿化や孤立化を防ぐためには、いつでも気軽に相談できる場所が必要です。

支援内容は、病院への付き添いや買い物の同行、引っ越しのお手伝いなど多岐にわたります。

日々の生活で生じる困りごとの相談をお聞きし、必要な機関や人とつながだけでなく、共に地域で生活する人間として、互いに尊重しながら支えあう関係を地域に構築することが目標です。



① 就労支援・定着支援

② 住居支援

③ 福祉事務所等との連携による支援

④ 健康・保健支援

⑤ 親族・地域との交流支援

⑥ 福祉制度等活用による支援

⑦ 法律・人権支援その他

⑧ 定期訪問

⑨ 互助会連携

⑩ 看取り等支援

⑪ 金銭管理支援



引っ越しのお手伝い



安否確認訪問



葬儀の支援

*2021年度実績：支援件数のべ22,795件 支援人数のべ7,055名

●ボランティア

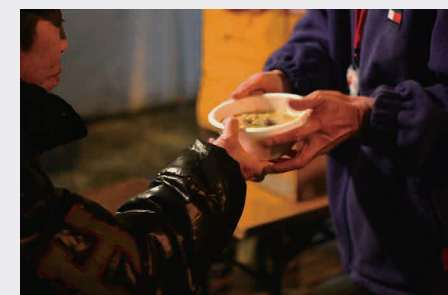
抱樸にとって欠かせないのが、ボランティアの存在です。実際に私たちの活動はすべて、ボランティアから始まっています。また、地域共生社会を実現するうえでも、ボランティア活動への参加はとても大切なことだと考えています。

ボランティアで行なう活動は各「委員会」が企画し、活動のコーディネートは抱樸のなかに設置した「ボランティア事務局」が担当しています。（ボランティア活動にご興味のある方は、P25をご覧ください）

●委員会が主導する活動、3つの柱

・炊き出し

2021年度はコロナのため、レイアウトの変更や時間の短縮、食事スペースの撤去、星空カフェの中止などによって「交わりの時間」が減った代わりに、全国から寄せられたメッセージを当事者に手渡しする「炊き出しお手紙作戦」を大きく展開しました。



・自立支援住宅

入居に関する面談、入居式、入居後の日常支援、自立支援プログラム、出発式などを行い、関係性を深めています。

2021年度は、コロナウイルス流行が長期化するなか、料理プログラムと思い出プログラムは開催したものの、食事は見送り、入居式および出発式は食事なしの縮小開催となりました。

・自立後サポート

① お見舞いボランティア

施設や病院におられる方々を定期訪問するボランティア活動。2020年度以降はコロナ影響で活動が止まりましたが、2021年度は対象者の方々へクリスマスカードの寄せ書きも送りました。また、手づくりのお見舞いカードを直接玄関先にお届けに行く活動も行いました。

② カードづくり

バースディカードとお見舞いカードを毎月つくってます。2021年度はのべ791通を発送しました。

③ なごみカフェ運営

抱樸館北九州のレストランで毎週開催のカフェ運営。コロナの影響でボランティア参加者数が36人でした。2021年度は、11、12、1月のみの開催。計9回開催。

④ お花を飾ろうプロジェクト

ボランティア講師をお招きして、季節のお花を使ったフラワーアレンジメントを作成し、抱樸館北九州に飾ります。

*コロナのため、休止

⑤ 書き方教室

ボランティア講師に硬筆のさまざまなお手本と筆記用具をご用意いただき、参加者一人ひとりに合ったお手本で、練習・添削をしていただきます。*コロナのため、休止

⑥ 声かけのための訪問月間

担当ボランティアが抱樸館入居者のもとを訪ねる「一斉訪問」。2021年度はコロナ対策として10月を「訪問月間」と定め、人数を分散して訪ねるかたちを取りました。うちに寄せ書きをしてメッセージと共に「涼」を届けました。

⑦ 冥土の土産（思い出づくり）プロジェクト

身寄りのない方の「行きたい場所がある」「やってみたいことがある」といった、ご希望を叶えていく企画。



①



②



③



④

◎互助会

月500円の会費で、誰でも参加可能な互助グループです。

出発点となったのは、路上から自立した後、再びひとりぼっちにならないように、そして人生の終わりにはみんなで看取り・送りたいと考えた、自立者のみなさんがつくった「なかまの会」です。助けられたり、助けたり——そんなつながりが地域に広がればと、なかまの会を土台に、「互助会」ができました。互助会は「人はひとりでは生きられない」を基本に、3つの精神を大切に活動しています。



- ①「なかま」——仲間をつくる、仲間になる
- ②「お互いさま」——助けられたり助けたり
- ③「ふるさと」——助けて、と言える居場所をつくる

互助会は「共に生きる地域社会の創造」を行なうための事業であり、地域に開かれた大きな家（ホーム）です。誰もが「なかま」。いつでも、どなたでも歓迎します。

※互助会のなかには、野宿の経験を分かち合える当事者グループ「なかまの会」もあります。

【活動内容】

① 互助会レター

行事カレンダーやその月に誕生日がある会員の紹介など、会員交流のための「互助会レター」を毎月発行しています。安否確認もかねて、一人暮らしの方には、なるべく手渡しでお届けしています。遠方の方には郵送でお届けします。



①

② イベント

なごみカフェでのプチバザーや、卓球・カラオケ・囲碁・将棋といったレクリエーションなど、定期的な集いを開いています。季節毎のレクリエーションとして、お花見、そうめん流し、バスハイク、地区懇談会なども企画しています。2021年度はほとんどのイベントが中止となり、電話を使った声かけなどを模索しました。



③

③ 誕生日会

毎月第3月曜に抱樸館北九州で行ってきましたが、2021年度はコロナ禍のため11月、12月2回のみ開催となりました。延べ70人が参加しました。

④ 炊き出しのための衣類物資仕分け作業と地域清掃

毎週金曜日に八幡東区の倉庫に集合して実施しています。

*2021年度：35回実施（1回平均8.0名参加）



⑤

⑤お祝い金・お見舞金

長寿やご結婚のお祝い、また入院お見舞いも出しています。金額はささやかでも、その方のことをみんなで思います。

*2021年度 卒寿（90歳）1名、米寿（88歳）0名、傘寿（80歳）2名、喜寿（77歳）8名、古希（70歳）7名

⑥ お助け活動

「助けられたり、助けたり」。互助会員が得意なことで、お困りごとのお手伝いする「お助け活動」をやっています。2021年度は70代の刃物研ぎの「プロ」が隔月で、抱樸館北九州でその技を見せてくださいました。



⑥

⑦ 互助会葬

「なかまの会」の会員が亡くなられたとき、互助会のみんなで葬儀を執り行ないます。だれが自分を看取ってくれるのか？「なかまの会」ができた背景には、さまざまな事情で社会的孤立に陥った自立者の切実な思いがありました。「なかまの会」が大切にしてきた葬儀は、互助会で最も大切な活動として受け継がれています。生前をともに過ごしたなかまやボランティアが故人をしのび、思い出を語り合います。葬儀には故人を知らない人も多く参列します。ともに過ごした時がなくても、精一杯生きた人生を、みんなで心に刻みます。2021年度からは、互助会に入っておられない方々のご葬儀に互助会より献花をお届けする取り組みを始めました。

*2021年度 互助会葬：7件 参列者総数：298名



⑦

⑧ 偲ぶ会

「なかまの会」では年に1度、先立ったなかまを追悼する「偲ぶ会」を開いています。互助会となっても毎年欠かさず、続けています。壇上に懐かしい遺影を並べ、一人ひとりの名前と没年を記した「追悼幕」を掲げます。抱樸が支援にかかわり、亡くなった方で引き取り手のなかった自立者の方々も、一緒に追悼しています。現在、追悼幕には200名近い方々のお名前が記されています。

*2021年度開催 10月7日 参加数：73名



⑧

⑨お電話作戦

コロナ禍で会えない状況が続くなか、単身独居で介護サービスの利用や抱樸の事務所への定期的な来訪がない75歳以上の会員のみなさんを対象に、月に1度、お電話をかけおしゃべりする活動を始めました。

*2021年度：対象者4月次17人～3月次12人

ボランティアの声



三好さん（互助会・なかまの会の世話人）

「なかまの会」の世話人としての仕事は、炊き出しの日の朝にみんなで集まって物資の仕分けをしたり、互助会レターを届けたり。安否確認の意味もあるから、互助会レターは直接渡しに行ってるよ。昔、自分も海の近くでホームレスしとったときに、抱樸のボランティアの人が何回もお弁当やら靴やら届けてくれて、嬉しかったけん。自立した後に、みんなからしてもらったこと、自分も誰かに返さないかんと思って。炊き出し後のパトロールにもボランティアで参加しとるけど、野宿の人には自分みたいに支援受けたらいいのに、と思うよ。やっぱり外は危ないもん。寒かったり、石投げられたり。今の生活はほら、楽しいよ。気の合う仲間と一緒に作業したり、話したりするのが。冗談が言い合える人がおるのは幸せよ。コロナになってから、なごみカフェとかお祭りがなくなって、寂しい。早く元に戻ったらいいのに。

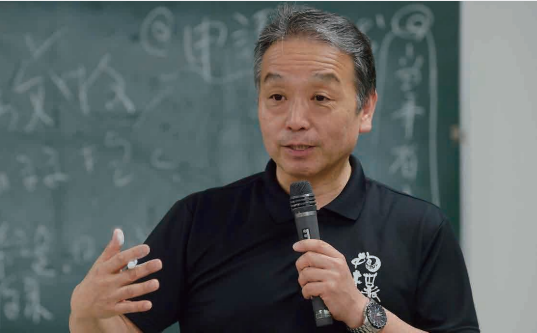
▶ 政策提言・周知活動

ホームレスを生まない社会を目指して

私たちは、目の前の方をどう支えるかと共に、ホームレスや孤立の状態にある方を生まない、誰もが生きやすい社会をつくるための活動も行なっています。その一環として、行政への提言活動や広報・周知活動に取り組んでいます。

●政府・行政への提言

抱樸は、困窮・困難な状況のなか、自ら助けを求めることのできなかった方々を支援しています。その人たちに代わって社会問題やあるべき支援を国や自治体に提言していくことが、出会った者の責任です。これまでも北九州におけるホームレス支援に関するグランドプランや北九州市への政策提言、全国の支援団体と協力して法整備に関する呼びかけ活動を行ってきました。目の前にいる困っている方への支援とあわせて、社会情勢の把握と提言により、“ひとりも取り残されない社会”を目指します。



撮影：タカオカ邦彦

【2021年度の主な提言活動】

- ・ホームレスの実態に関する全国調査（生活実態調査）検討会
- ・生活困窮者自立支援のあり方等に関する論点整理のための検討会

【2021年度の主な講演会（オンライン開催含む）】

- ・自治体の人権研修会、市民集会
- ・イベントトークゲスト
- ・企業での講義

いきわらいちざ
●生笑一座

理事長の奥田や副理事長の谷本が、野宿経験のあるメンバーと「人生」について語らいながら、ワークショップや歌などを披露する一座です。2013年の結成以来、小中学校を中心に全国で公演を行ってきました。「もう死ぬしかない、と思ったけれど、今、生きていて本当によかった。生きてさえいえば、笑える日が来る」というメンバーの“本当のことば”は、つらい思いを抱えている子どもたちに響いています。



生笑一座実行委員会
WEBサイト



●ほうぼくチャンネル

コロナ禍により対面の講演会の中止が相次いだ2020年、「より広い層に抱樸の理念や活動を知ってもらいたい」と、5月にYouTubeで番組配信〈ほうぼくチャンネル〉を開始。2021年度は、内田樹さん（思想家）、モモコグミカンパニーさん（BiSH）、今井紀明さん（認定NPO法人D×P理事長）、永井玲衣さん（哲学者）らをゲストに招き、24番組をお届けしました。奥田理事長と多彩なゲストの対談を中心に、毎月2回の配信を継続的に行なっています。



ほうぼく
YouTubeチャンネル



●情報発信

SNSでも随時情報発信をしています。フォローや拡散のご協力をお願いいたします。

YouTube ほうぼくチャンネル

Facebook @npohouboku

note https://note.com/npohouboku

Twitter @npohouboku

Instagram @houboku.npo

theLetter https://houboku.theletter.jp/

会計報告

科目		金額（単位：円）	
		2020年度	2021年度
Ⅰ 経常収益	受取会費収益	1,945,000	2,891,000
	寄付金収益	257,013,100	145,535,367 ①
	助成金収益	34,528,258	82,877,470 ②
	補助金収益	22,548,785	18,743,224 ③
	事業収益等	215,866,582	236,201,407 ④
	受託事業収益	252,974,916	275,665,260
	雑収益／その他収益	27,921,920	20,672,479
経常収益計		812,798,561	782,586,207
Ⅱ 経常費用	1 事業費		
	人件費（役員報酬含む）	263,692,236	298,036,858
	法定福利費	38,415,642	43,493,948
	福利厚生費	504,338	541,934
	旅費交通費	9,103,354	9,495,889
	消耗品費	24,399,626	20,584,961
	通信費	8,314,670	9,015,122
	水道光熱費	10,403,045	11,974,282
	賃借料	8,868,822	10,098,031
	委託費	16,783,531	24,510,390
	租税公課	24,060,256	33,071,757
	地代家賃	33,800,364	23,572,735
	給食費	9,234,939	9,432,400
	利用者工賃	5,196,125	6,546,470
	業務管理費	19,428,310	14,306,565
	講習費	12,745,953	11,736,166
	自立支援費	11,014,370	10,881,033
	減価償却費	7,485,533	16,038,988
	その他経費	133,490,549	42,098,605
	事業費計	636,941,663	595,436,134
	2 管理費		
	（1）人件費	29,462,126	19,776,080
	（2）その他経費	8,326,051	21,018,609
	管理費計	37,788,177	40,794,689
	経常費用計	674,729,840	636,230,823
	当期経常増減額	138,068,721	146,355,384
Ⅲ 経常外収益		2,194	1,397,061 ⑤
Ⅳ 経常外費用	1 雑損失等	341,070	400,401
	税引前当期正味財産増減額	137,729,845	147,352,044
	法人税、住民税及び事業税	241,000	241,000
	当期正味財産増減額	137,488,845	147,111,044
	前期繰越正味財産額	210,606,693	348,095,538
	次期繰越正味財産額	348,095,538	495,206,582 ⑥

① 寄付金

コロナ禍支援のクラウドファンディングなどのあった2020年度と比較すると、56％の1億4,500万円でした。子ども支援のクラウドファンディング373万円も含まれています。また、毎月定額の支援をいただいている「ほうぼくサポーター」は目標の1,500人を達成することができました。約3,800万円は社会福祉法人設立指定の寄付金としてご支援をいただきました。

② 助成金

居住支援のための休眠預金助成金（パブリックリソース財団）から4,700万円、子ども支援のための休眠預金事業（READYFOR）から730万円などが含まれています。

③ 補助金

厚生労働省社会福祉推進事業（調査研究事業）1,000万円、国土交通省居住支援法人補助金630万円などがありました。

④ 事業収益等

不動産収益、事業収益、保険料収益、出向者負担金収益の合計です。

⑤ 経常外収益

受取利息、退職給与引当金戻入益、固定資産売却益の合計です。

⑥ 次期繰越正味財産額

次期繰越正味財産額として約5億を繰り越しました。ここには、不動産（抱樸館、ブラザ、希望のまち予定地）などの現金では無い資産が約3億円、現預金等の流動資産約2億が含まれています。その2億は、コロナ禍で整備した支援付き住宅のアフターフォロー経費、委託や事業収入等安定した財源の無い炊き出し、子ども支援などを実施する活動費、また希望のまちプロジェクトを実施するための準備資金のために繰り越しました。炊き出しや子ども支援、また金融機関から4億近い借り入れを行なっても事業が継続できているのは、ご寄付により支えてくださる方がいてくれるお陰です。『ひとりにはない』という支援を行なうためにこれからも頑張っています。



青野慶久（サイボウズ株式会社代表取締役社長）

生活困窮を自己責任にすることなく、社会で役割分担して支え合う活動に共感し、サポーターとして抱樸さんの活動を支援させていただいております。これからの社会においては、動きの遅い政治に期待し過ぎることなく、一人ひとりが主体的に行動することが大切だと考えています。みなさまもぜひ！



雨宮処凛（作家／活動家）

自分自身、支援活動をしながらも、本当に自分が困ったときに「助けて」と言えるかと問えば、そのハードルの高さに身がすくむ。だけど、なぜか奥田さんには言える気がしていて、そういう安心感が、みんなにとっての抱樸なのだと思う。助け合いの実践を、ともに広げていきましょう。



石原海（映像作家／ボランティア）

いままで訪れた場所でいちばんパンチの効いてた場所が抱樸の花見でした。花が散ったあとの桜なき緑に囲まれて「花見」と呼ぶその日の熱狂と愛と、そこにいる人々の存在に痺れました。そして、気づいたらアタシは北九州に引っ越していました。抱樸の活動を目撃し続けなければいけないと思ったからです。大好き抱樸、がんばれ抱樸！ これからもずっと関わらせてください。



今井紀明（認定NPO法人D×P 理事長）

孤立はいくつかの安心できる場や所属先を失ったときに起こります。孤立すると社会のセーフティネットへ辿り着くのも難しくなり、深刻な状況に陥ってしまうこともあります。そのようななかでも「希望のまちプロジェクト」は、誰もがつながりをつくることのできる場所を実現していこうとしています。クラウドファンディングのときから、応援しておりました。社会における孤立をなくすためにも、このプロジェクトを応援したいと思います。



コムアイ（アーティスト）

正義と悪を決めて取り締まるようなやり方ではなく、どんな人も、誰ひとりとしてこぼれ落ちないように、やさしく強く、包み込む。日本は包容力のある社会だって自信をもって言える、そういう未来のために、抱樸の挑戦は大切な一歩です。日々のなかでそれを継続されていること、尊敬の眼差しで見つめています。



佐久間庸和（株式会社サンレー代表取締役社長）

抱樸はこれまでの「問題解決型支援」に加えて、つながり続ける「伴走型支援」へと活動の幅を広げてくれました。これはまさに“隣人愛”の実践であり、弊社が経営理念として掲げてきた“人間尊重”にも通じていると思います。今後も有縁社会の実現を目指して、同志として共に歩んでまいりましょう！



杉山春（ルポライター）

「希望のまち」は、たぶん、私たちにいろいろなことを教えてくれるはず。人はこんな風にともに生きることができるのだと。自分は自分でいいのだと。自分にはこんなに人を助ける力があるのだと。誰でも未来に希望を持っていいるのだと。生まれてきたことは、本当はとても幸せなことなのだ。そんなまちづくりに参加しませんか？



田口ランディ（作家）

抱樸の活動を見ると、人間に寄り添い続ける慈悲を感じます。新型コロナウイルスの感染拡大のなかで人と人との繋がりが見直されています。このような社会の転換点に「希望のまち」構想が立ち上がってきたことは必然でしょう。社会的なピンチを、この国の舵取りを福祉に向けるチャンスに変えてくれるこのプロジェクトを、私は心から応援いたします。



玉木幸則（NHK Eテレ バリバラコメンテーター）

最近「だれひとり取り残されない」というようなことをよく耳にしますが、ほんまですか？と聞き返したくなります。今この瞬間にも、生きづらさを感じている人やその生きづらさにも気づかないままで、一生懸命に生きている人がいっぱいおられると思います。抱樸の「希望のまちプロジェクト」が、すこしでも「生きづらさの解消」へつながっていくよう期待しています。だれもがともに生きていくことができる社会にしていけるためにも。



永井玲衣（哲学研究者）

わたしは抱樸のサポーターであることが、とてもうれしいです。それは、この生きづらく、疲れ果てた社会を、抱樸が変えようとしているからです。一人ひとりに丁寧に向き合いながら、壊れた社会の流れに抗おうとしているからです。あなたと一緒に、抱樸を支えたいです。ここからこそ、社会が変わると信じています。



平田オリザ（劇作家）

「文化による社会包摂」は、すべての人にとっての「希望」です。応援しています。



平野啓一郎（小説家）

困難な時代を生きている。私たちは、自分の生活に安心が欲しくて、それを守ることに懸命になる。しかし、一人でできることは限られている。真の安心とは、困難に直面した時、この社会に救済される場所があることである。その優しさを感じられることである。そのためには、まずは今現在、苦境にある人たちに手を差し伸べなければならない。抱樸がその拠点となることを期待しています。



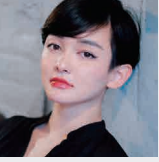
平野健二（株式会社サンキュードラッグ代表取締役社長兼CEO）

誰か自分以外の人を助けるとしたら、まずは家族のことを思い浮かべるでしょう。その家族が崩壊している家庭があるとしたら、社会は真っ先に手を差し伸べるべきではないでしょうか。格差、貧困、育児放棄……原因はさまざまですが、まずは前に向いて歩みだす人を支えることに、勇気と希望を差し上げたいものです。



藤原辰史（歴史学者）

激しすぎる競争社会にさらされた近代家族には、構成員全員の苦しい状態に安らぎを与えるほどの力はほとんど残されていません。だったら、その家族制度からはみ出ってしまった人たちの居場所や、近代家族を支えるようなもうちょっと緩やかで広い「家族」が必要だと、私は「縁食」という概念を用いて論じてきました。「希望のまち」はまさにそんな試みなので、応援せずにはいられないのです。



みたらし加奈（臨床心理士）

命を脅かす“孤独”が訪れたとき、差し伸べられた手を掴むことは難しい。呑み込んでしまった「助けて」や、やっと言葉にできた「助けて」に正面から向き合い続ける姿勢は、生半可な気持ちではできないことではない。抱樸の背中を見ながら、「助けて」と言える社会のために、自分に何ができるのかを問い続けている。そしてこれからも抱樸の活動を応援している。



水野敬也（作家）

希望を感じる事が少ない現代社会で、「希望のまち」は人の心に夢をもたらす大事な灯火だと思います。一人でも多くの人が、この火に小さな薪をくべ、大きな光にしていけることが、希望に満ちた社会を作るのだと思います。



村木厚子（元厚生事務次官／伊藤忠商事社外取締役）

これまで抱樸は、困難を抱えた人々に寄り添い、「私たちがそばにいるよ」と声をかけ続けてきました。抱樸がそうした活動が続けることができたのは、抱樸を応援してくださる応援団がいたからです。コロナで困難を抱える人は増えましたが、抱樸の応援団も大きくなりました。その力を得て、さらにいい仕事をしてください。



茂木健一郎（脳科学者）

誰もが、その場所に追いやられ、その立場になる可能性がある。だから、手を差し延べることは、未来の自分、あるいはそうなったかもしれない自分を助けること。奥田知志さんとは20年以上のお付き合いとなりました。奥田さんの他助と自助の人間どまんなかの伝言に全面共感。

抱樸をサポートするための3つの方法

抱樸の活動は、みなさまのご寄付によって支えられています。
支援を必要としている方々に届けるため、ぜひ財政的なご支援をお願いいたします。

①ほうぼくサポーター：1000円からのご寄付

抱樸の活動は皆さまからのご寄付によって支えられています。そこで、毎月定期的なご寄付をくださる「ほうぼくサポーター」を募集しています。初回のクレジットカード登録で、毎月定額の支援が可能です。（口座振替による登録もできます）。サポーターのみなさんには月1回、活動報告や支援現場の声をお届けする、読み応えのあるメールマガジン『ほうぼくサポーターかわら版』をお送りします。

1,000円で



炊き出し3人分のお弁当を用意できます！

5,000円で



子どもたちに学習支援を1度行なうことができます！

10,000円で



住まいを手配し、新しい生活のスタートを支えられます！

②都度のご寄付

毎月ではなく、都度のご寄付もありがたくお受けしています。自由金額でのご寄付もクレジットカードの他、ゆうちょ銀行からのお振込みができます。

③遺言による寄付／相続財産からの寄付

わたしたちの活動は、他人同士が会って、知り合って、支え合う「仕組み」をつくる活動です。「財産の一部を社会のために遣ってもらいたい」「遺産を相続したが、一部を寄付したい」——そのような想いを抱樸は受け止め、支援につなげていきます。しんどい状況に陥った人も、再び誰かと微笑み合える、そんな暮らしを、あなたの手で支えていただけないでしょうか。

ほうぼくサポーターやご寄付にご興味がある方は、右記のQRコードまたは抱樸HPをご覧ください。クレジットカード決済のほか、郵便振替でも支援いただけます。「ひとりにしない」社会を一緒につくっていきましょう。

寄付ページ▶

www.houboku.net/webdonation



ご支援を賜っている法人賛助会員のみなさま

(2022年8月15日現在)

株式会社 l'mbesideyou

株式会社 M&M

一般社団法人 MHC リサーチ&コンサルティング

株式会社 九州エムアイ通信

株式会社 サンキュードラッグ

株式会社 サンレー

株式会社 清栄

宗教法人 専念寺

大和証券 株式会社

株式会社 ひまわり

株式会社 松波＜大邸（テグ）食堂＞

株式会社 山猫総合研究所

認定特定非営利活動法人 日本ファンドレイジング協会

ラックユニティ株式会社

* 50音順に記載しています。

抱樸に参加するための3つの方法

①ボランティア

抱樸では、炊き出しやパトロールをはじめとした、さまざまな活動へのボランティアを募集しています。北九州でのお弁当づくり、炊き出し運営、パトロールはもちろん、遠方から支援に参加される方々もいます。また、さまざまな事情で学校や塾へ通うのが難しい、小中高校生の子どもたちに、勉強を教える大学生ボランティアも募集中。（NPO 正会員になると、個人情報の守秘義務に誓約のうえ、個々人に寄り添う活動にもご参加いただけます）

②「互助会」に入りませんか？

互助会は、誰でも参加可能な会員制の共同体グループです。月500円の会費で、イベントへの特待参加、入院見舞金や長寿のお祝いを受けられ、互助会葬も出すことができます。ここでは、「支援する人／支援される人」という線引きはありません。「おんなじいのち」の取り組みに参加するため、遠方にお住まいの方も多くいらっしゃいます。いつでも、どなたでも歓迎します。

③一緒に働きませんか？

抱樸では一緒に働く仲間を募集しています。フルタイムからパートタイムの仕事まで。ご応募の際はお電話でご連絡のうえ、履歴書をご送付ください。

お問い合わせ先

Tel: 093-653-0779

Fax: 093-653-0779

E-mail: npo@houboku.net

ボランティアや求人募集については、右記のQRコードまたは抱樸HPをご覧ください。



抱樸ボランティアページ▶

www.houboku.net/volunteer/

事業所一覧

NPO 法人 抱樸（代表）

〒805-0015
福岡県北九州市八幡東区荒生田2-1-32
Tel: 093-653-0779
Fax: 093-653-0779
E-mail: npo@houboku.net

ホームレス自立支援センター北九州

〒803-0811
福岡県北九州市小倉北区大門1-6-48
Tel: 093-563-3069
Fax: 093-581-3566
巡回相談 Tel: 093-571-1304

抱樸館北九州

〒805-0027
福岡県北九州市八幡東区東鉄町7-11
（デイサービスセンター抱樸 併設）
Tel: 093-883-7708
Fax: 093-883-7705

多機能型事業所ほうぼく（抱樸）

〒803-0811
福岡県北九州市小倉北区大門1-4-5-2階
Tel/Fax: 093-581-0901

ほうぼく第2作業所

〒802-0084
福岡県北九州市小倉北区香春口2-6-1-2階
Tel: 093-967-8995
Fax: 093-967-8996

グループホームほうぼく

〒802-0064
福岡県北九州市小倉北区片野4-15-13
ロイヤルプラザ 1階
Tel/Fax: 093-923-0845

日常生活支援住居施設・プラザ抱樸

〒802-0064
福岡県北九州市小倉北区片野4-15-13
ロイヤルプラザ内
Tel: 093-922-8580

中間市市民生活相談センター

〒809-0034
福岡県中間市中間2-10-1
Tel/Fax: 093-246-1030

福岡県地域生活定着支援センター

〒810-0042
福岡県福岡市中央区赤坂1-8-8
福岡西総合庁舎 2階
Tel: 092-406-7895
Fax: 092-406-7896

抱樸かわら版DX(デラックス)

2022 vol.2

編集：江田初穂（抱樸）
谷瀬未紀（抱樸）
小幡あゆみ（抱樸）
平岩壮悟
デザイン：千原航
発行日：2022年9月1日
発行者：認定NPO法人 抱樸
〒805-0015
福岡県北九州市八幡東区
荒生田2-1-32

